藤沢市
藤澤浮世絵館
FUJISAWA UKIYO-E MUSEUM

浮世絵館だより

2025年3月
Vol.26

もくじ

展示紹介
「浮世絵でめぐる明治の東海道と藤沢　東海名所改正道中記」…… P1
明治の東海道　文明開化の波 …… P2
藤沢駅と藤沢停車場 …… P3
二代目オニカゲ学芸員のページ⑮
　流行のビビットカラー「洋紅（ようこう）」/編集後記 …… P4

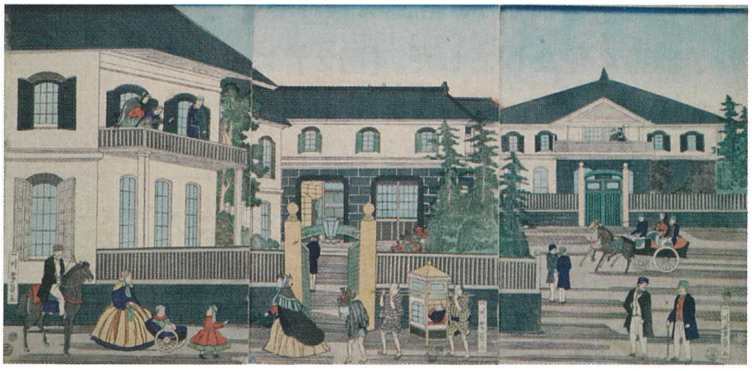
浮世絵でめぐる明治の東海道と藤沢
東海名所改正道中記

会期　2025年3月4日（火）～5月6日（火・休）

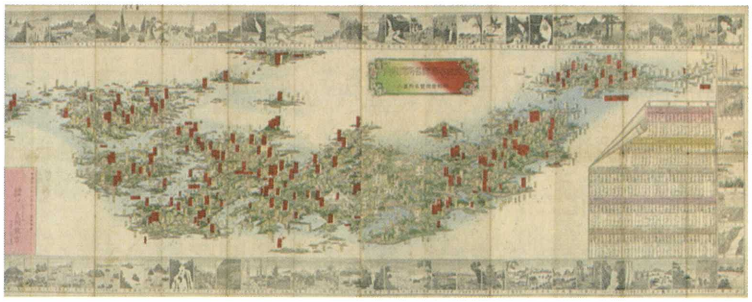
明治になると、海外文化の影響を受け日本が急速に近代化したのと同様に、浮世絵として描かれる東海道も大きく変化していきました。なかでも、明治８年（1875）に出版された三代歌川広重の「東海名所改正道中記（とうかいめいしょかいせいどうちゅうき）」シリーズは、変わりゆく明治の東海道を活写した名作として知られています。

今回の展示では、「東海名所改正道中記」（60 図）をすべて展示します。また、明治に描かれた浮世絵や絵図とともに、新たに流入してきた銅版画や石版画、写真を交えて、明治の東海道や藤沢、江の島の移り変わりを紹介します。

三代歌川広重「東海名所改正道中記
四　六郷川鉄道　川崎　神奈川迄二り半」



歌川芳員「題名不詳（横浜異人商館の図）」



大川錠吉「大日本府県名所独案内」

明治の東海道　文明開化の波

三代歌川広重

三代歌川広重は、「東海道五拾三次之内」シリーズで有名な初代歌川広重の弟子で、幕末から明治期に活躍した浮世絵師です。活動当初は、重政と名乗っていましたが、慶応元年（1865）に二代広重が師家を去ったあと、初代広重の養女と結婚して三代広重を襲名します。「東海名所改正道中記」のような文明開化絵や横浜絵、東京名所絵などを数多く制作しました。

【図１】三代歌川広重
「東海名所改正道中記　二
汐留鉄道館　新橋　品川
迄一りニ十丁」

【図２】三代歌川広重
「東海名所改正道中記　一
伝信局　日本橋　新橋迄
十六町」

文明開化と新しい流行

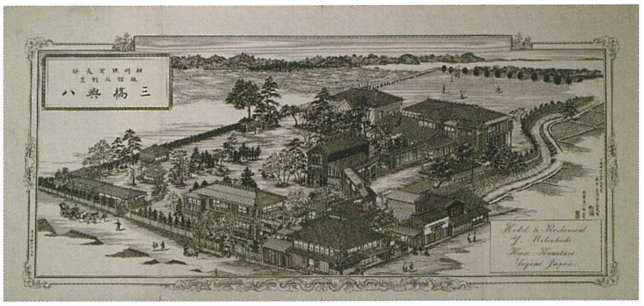
「東海名所改正道中記」は、日本橋から京都までの 59 図に目録を１枚加えた全 60 図からなる揃物です。三代広重は、「東海名所改正道中記」の中で、明治初期に広まった文明開化を象徴する新しい事物を生き生きと描き出しました。

明治５年（1872）に日本初の鉄道が新橋～横浜間で開通すると、新橋駅は東京の玄関口となりました。【図１】では、モダンな駅舎が描かれています。また、蒸気機関車だけでなく、人力車も新しい乗り物として広まりました。人力車は、明治２年（1869）に東京の和泉要助や高山幸助らが共同して、西洋の馬車をモデルに考案開発したと言われています。駕籠（かご）に代わる新たな乗り物として、めざましく普及しました。【図２】にも日本橋を行き交う人力車が描かれ、ザンギリ頭や帽子をかぶった洋装の人も見られます。

また、明治期には、海外から入ってきた新しい印刷技術が広まり、従来の木版画だけでなく、緻密（ちみつ）に彫ることができる銅版画【図３】や多様な表現が可能な石版画【図４】の作品が多く作られるようになりました。

一方で、浮世絵にも、海外から輸入された新しい絵の具が使われ、鮮やかな赤や紫、緑などが明治期の流行色となりました。

風景の変化だけでなく、東海道の描き方にも、新しい技法や絵の具など文明開化の波が押し寄せているのが分かります。



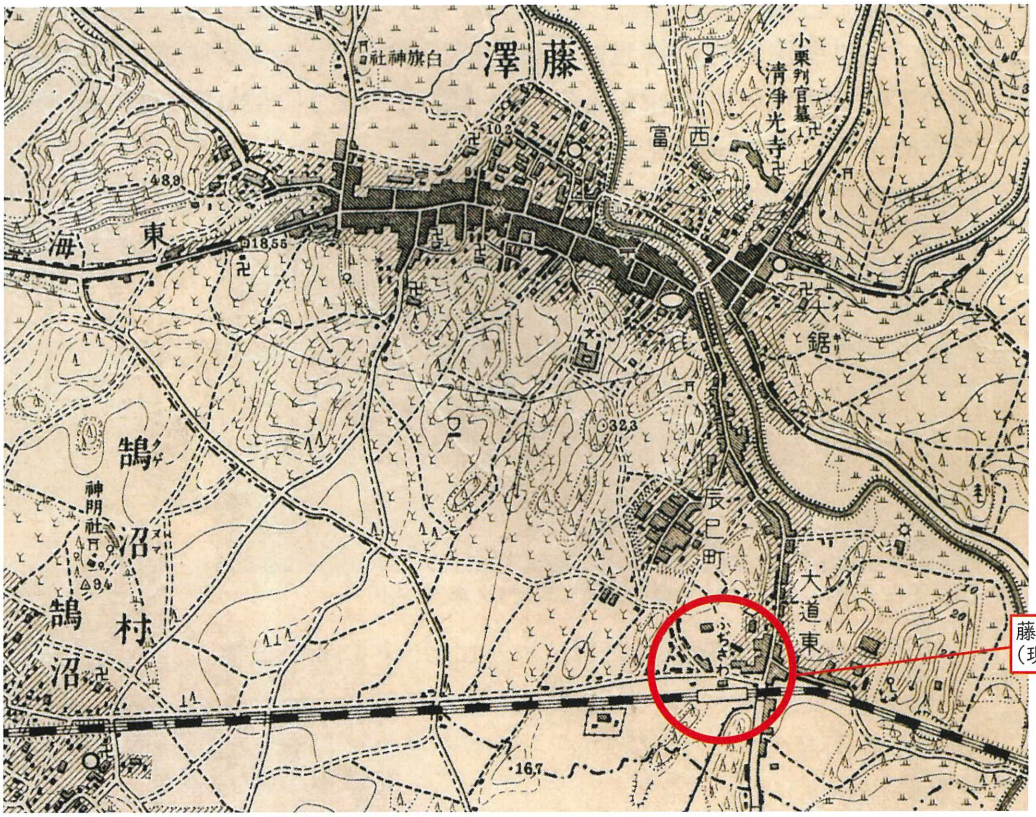
【図３】作者不詳「相州鎌倉長谷　旅館並割烹　三橋與八」
銅版画

【図４】吉原秀雄「江の島之真景」石版画

藤沢駅と藤沢停車場

今尾恵介（地図研究家）

品川、大森、川崎、鶴見、神奈川、横浜、程ヶ谷、戸塚、藤沢、平塚、大磯・・・。「東海道五十三次の宿場」のように見えて、どこか違和感を覚えるのは大森、鶴見、横浜が挟まっているからだ。駅名としても大船や辻堂、茅ヶ崎など多くが抜けている。



藤沢駅（宿場）と南に離れた藤沢停車場 1:20,000「藤沢」明治 39 年（1906）測図
※地図上部中央の藤澤の標記下に塗りつぶしたように見える、家屋の密集地帯が藤沢駅（宿場）です。
紹介図のため、縮尺は 1：20,000 ではありません。

実はこれ、明治20年(1887) 7月11日に官営東海道鉄道（現東海道本線）が横浜（現桜木町）から国府津まで延伸した時点の停車場名だ。藤沢停車場の東隣の戸塚までは 10.2km、西隣の平塚までは 12.8km（いずれも当時）もあった。ひと駅の距離としてはずいぶんと長いが、当時としてはそれほど珍しくない。

新橋～神戸間が全通したのは明治 22 年（1889）7 月 1 日であるが、その翌年には鉄道旅行ガイドブックの初期の例として『東海道鉄道筋諸国旅案内』が翌 23 年 2 月に発行されている。駅ごとに名所旧跡などを紹介したもので、これによれば藤沢停車場は「神奈川県相模国高座郡藤沢駅の南数町ニアリ」としている。

現代語で「藤沢駅から南へ数 100m の位置に藤沢駅」などと解釈しては奇妙なことになるが、当時は駅といえば宿場を意味した。これが鉄道停車場を意味するようになるのは、まだまだ先の大正から昭和にかけての時代である。ちなみに駅の旧字である「驛」は中継する馬（繋ぎ馬）を意味することから転じて、馬を常備してその中継を担う休泊施設を指した。時代が遷ってその機能が鉄道に取って代わったため、停車場を駅と称するようになったらしい。ちなみに驛のツクリである睪の字は「次々にたぐり寄せる」という意味を持つ。

このガイドに挙げられた名所のひとつ、江ノ島は「南一里十丁（約 5.0km）」とあるが、江ノ電の開通前だから誰もが歩いて行ったのは言うまでもない。それでも江戸からずっと歩き通しの時代を思えば、あっという間だろう。鉄道はまだ黎明期であった。

二代目オニカゲ学芸員のページ⑮

流行のビビットカラー「洋紅」

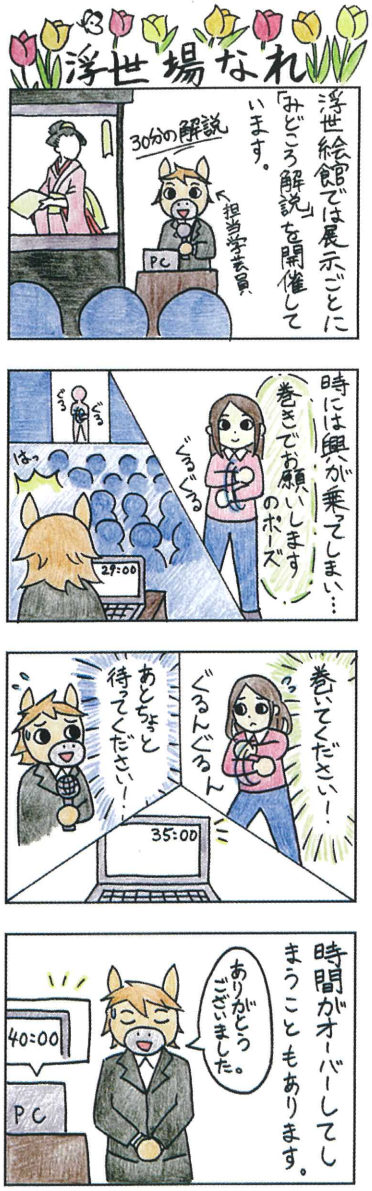
皆さんは明治時代の浮世絵って聞くとどんなイメージがわきますか？オニカゲ学芸員は初めて明治時代の浮世絵を見たとき、【図1】のように空が真っ赤な絵が多くて衝撃を受けたためイメージは「真っ赤！」です。

【図1】三代歌川国貞「横島田鹿子振袖」明治22年（1889）

明治時代の浮世絵に使われているビビットな赤の正体は洋紅という染料です。洋紅は江戸時代後期から使われ始めた外国産のアニリン染料で、鮮やかな色で褪色しにくい特徴があります。

江戸時代後期になると洋紅をはじめとしたいろんな染料や顔料が輸入されるようになり、当時の浮世絵師にこぞって使われる流行色になりました。洋紅を大量に使った絵は「赤絵」と呼ばれることもあり、慶応年間から明治時代にかけて、特に文明開化絵や役者絵・美人画が多く描かれました。

現代の浮世絵に関連する書籍の中で、洋紅は「強烈」や「毒々しい」と形容されることが多く、不人気です。しかし、開化絵などでよく見られる洋紅は、当時の人々にとっては変わりゆく世の中を象徴するおもしろい色だったのではないでしょうか。



編集後記

今回の展示では、浮世絵だけでなく、江の島を写した明治の写真や銅版画、石版画も展示しています。開国を経て、大きく変わっていく明治期の東海道や藤沢の姿を楽しんでいただければ幸いです。

また、本誌を発行するにあたり、ご寄稿いただきました今尾恵介氏に深く感謝を申し上げます。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111　【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】藤沢市藤澤浮世絵館 で検索　【公式Instagram】fujisawa.ukiyoe で検索

facebook：藤澤浮世絵館 公式アカウント「いいね！」お願いします。

キュと藤沢 すてきなまち。